大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』の推進（47）

～　「憧れられる人より　憧れる人に」　～

石垣市教育委員会　いきいき学び課長・青少年センター所長　吉村 安史

自分を成長させてくれるのは「夢」だけではありません。例えば、有名人や周りの人に対する「憧れ」も、自分をいい方向に変えていくきっかけになります。

「すごいな」「素敵だな」「自分も、いつかあの人のようになりたいな」・・

こんな「憧れの気持ち」の根っこにあるのは、「自分をいい方向に変えたい」という向上心です。憧れの人が増える度、自分の中に「成長の種」を蒔いているということです。

誰かの中に「素敵だな」と思えるものを見つけると、その同じ素敵な種が自分の中に蒔かれていくのです。そして、憧れるほどに、自分の種がどんどん育ち、やがて花となって咲きます。「憧れられる人も素敵ですが、憧れている人はもっと素敵なのです。」

「尊敬されたいなら、尊敬していこう」と同じことです。自分よりも若くても未熟でも、相手に少しでもいいところがあれば、その価値を認めていくことによって、やがては自分が尊敬される存在になっていくのです。

大阪で過ごした中学生の頃、私自身もコンプレックスになる程、全く泳げませんでした。全国ニュースで「宮古島トライアスロン大会」を偶然見て、強い衝撃（憧れ）を受けました。灼熱の太陽の下、一人でスイム 3km、バイク 150ｋｍの後に続けてフルマラソン 42.196ｋｍを一日かけて走り続ける選手の姿に「トライアスロンは人間が行うスポーツの限界を超えている。」と釘付けになりました。

その後時は流れ、私は石垣島へ帰島しました。登野城漁港で開催された石垣島トライアスロン大会に直接関わる縁もあり、私は苦手のスイムを克服し、31 歳で憧れのトライアスリートの仲間入りをすることができました。思えば、中学生の時「トライアスリートに強く憧れた」ということは、その頃から実はトライアスリートになる種は、私の中に蒔かれ育っていったということになります。

そして、現在は、「八重山の方言」に魅力を感じ、その習得に向け日々励んでおります。八重山の方言を含む琉球諸語は、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）により消滅危機が指摘されています。私は「肝ドンドン、うるずん、美（かい）しゃ、かなさ～ん・・」等、日本語では決して伝えきれない沖縄方言の豊かさや共感し合える響きの心地良さを肝から感じ、「しぅまむに」の虜になると同時に、私自身も学ぶことで保存に少しでもつながればと思っています。その根底には、いつまでも「憧れ」の気持ちを持って、学び続ける「大人」でありたいという思いがあります。

さて、いきいき学び課は、社会教育や子ども・若者の不登校・ひきこもり等の事業を担当しています。所管課長として、「学校・家庭・地域連携事業」や「子ども・若者育成支援事業」等を柱に、「憧れる」機会を創っていきたいと努めております。

この場を借りて紹介させていただくと、「学校・家庭・地域連携事業」では、子どもの学びを学校教育だけでなく、教育の基である「家庭」や「地域社会」も含めた社会総がかりで育くみます。「子ども・若者育成支援事業」は、不登校・ひきこもり等の社会生活を営む上で困難を有する子ども・若者の育成支援に取り組んでいます。また、「子ども若者支援地域協議会」や臨床心理士による定期的な「子ども・若者

相談会」の取り組みも行っています。さらに、「学び遊び人材バンク」や「キッズ・Job・サポーター」等のボランティア制度事業、様々な社会教育団体・サークル・学級等の支援事業に取り組んでいます。

これらの事業を石垣島の豊かな自然・文化等とも、繋ぎ、掛け合わせる等、「子ども」だけでなく「大人」までも憧れを見い出し、その素敵な種をいつまでも育み合える生涯学習社会づくりを楽しんでいきたいと思います。